

# Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌

2003.12

Vol.3



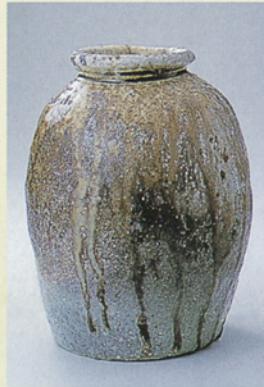
## 越前唐津で独自の世界

6期 三好 建太郎

もやもやして殺氣立つた札幌の高校を放校され、北星  
余市に拾つてもらいました。

時間が止っている様で静かな余市海岸をシリパを見ながらプラプラ歩いて学校に行き怒られたり、あんなこと、こんなこと、言えないこといっぱいやりました。そのた  
めか北星に1年しかいないのに3年いたと思っている先  
生、学友がいます。卒業目前赤点11教科、1週間徹夜に  
近い状態でつきあつて勉強を教えてくれた学友、先生達  
が目をつぶつて卒業させてくれました。陶芸の道へ入る  
きっかけも作つていただきました。

それから30年陶芸一筋でやつてきました。各地の高島  
屋の美術画廊で個展を開いています。今は11月の末の横  
浜高島屋での個展に向い作陶に励んでいます。



〒915  
1242 福井県武生市栗野町3の17

三好 建太郎

TEL・FAX 0778(28)1132

## 陶歴

|       |                            |
|-------|----------------------------|
| 1953年 | 北海道に生まれる                   |
| 1956年 | 茨城県笠間にて修業                  |
| 1957年 | 茶陶唐津・徳澤守俊先生に師事             |
| 1958年 | 武生市栗野町にて割竹式薪窯を築く           |
| 1959年 | 木村盛和先生の指導を受ける              |
| 1960年 | 横浜高島屋にて個展 (88・90・94・97・00) |
| 1961年 | 大阪高島屋にて個展 (97・00・03)       |
| 1962年 | 岐阜高島屋にて個展 (98・01)          |
| 1963年 | 高崎高島屋にて個展 (99・02)          |
| 1964年 | 日本橋高島屋にて個展 (01)            |



現在の三好さん

## あの頃

高3のある日の国語の時間、山先生が箱の中

から大事そうに一枚の絵皿を取り出し、私達に見せて下さった。雄々しい馬が描かれた

陶皿は、陶芸家の道を歩みはじめられた三好  
さんの作品だった。学生時代の三好さんはさ  
まざまな場面で「ナンセンス!」と叫び、既  
存の物事に反発する教師や同級生から一目お  
かれる存在だったらしい。しかし、壊しつ放  
して終るのではなく、そこから新しい創造を  
し、追求する生徒だったそうだ。

今回、三好さんを紹介させて頂くきっかけ  
になつたのは、20数年前に見せて頂いたあの  
絵皿と山先生のお話を思い出し、その後の三  
好建太郎さんの歩みをのぞかせて頂きたいと  
思つたからだつた。

一途に陶芸家としてその道を追求されてい  
る三好さんの世界を、今度、ぜひ北海道で拝  
見できる日を心待ちにしたい。



## 一期生の足跡

● 馬場 達

同窓生のみなさん、しばらく。私は

開校した昭和40年から病気退職した平成元年迄24年間在職した。その間1期生、4期生、9期生を担任し、卒業させた。その後校長として勤務した。かぎられた紙面では書ききれないほどの数多くの思い出がある。今回は1期生のことについて語らねばならない。

設置認可がでたのが昭和39年12月、校舎は夏休みまでに建築されるということではわかった。この校舎はまさにひどいの一言につける。色あせて、はがれそうな壁、風がふきこみ、雨もりがする馬小屋同然のうす暗い教室もちろんグラウンドも体育館もなかつた。

教師は専任8名、ほとんどが大学新卒である。劣悪な教育条件の中で生徒の荒廃状況はかなり深刻なものだった。まず授業がなりたたない。少なからぬ生徒が学校生活の現状に失望して、この怒りをどこにもつていけば良いのか。いいしれぬ挫折感をもつていた。多くの退学者をだしたこととは本当に申し訳なかった。

こんな中で教師は何を考えていたか。何とか民主的な理想の学校をつくりたい。管理と処罰で生徒を押さえつけた。その後校長として勤務した。かぎられた紙面では書ききれないほどの数多くの思い出がある。今回は1期生のことについて語らねばならない。

設置認可がでたのが昭和39年12月、校舎は夏休みまでに建築されるということではわかった。この校舎はまさにひどいの一

言につける。色あせて、はがれそうな壁、風がふきこみ、雨もりがする馬小屋同然のうす暗い教室もちろんグラウンドも体育館もなかつた。

教師は専任8名、ほとんどが大学新卒である。劣悪な教育条件の中で生徒の荒廃状況はかなり深刻なものだった。まず授業がなりたたない。少なからぬ生徒が学校生活の現状に失望して、この怒りをどこにもつていけば良いのか。いいしれぬ挫折感をもつていた。多くの退学者をだしたこととは本当に申し訳なかった。

1974年(昭和49年)の馬場先生



2003年(平成15年)の先生



## 北星余市高校 メモランダム

●馬場 達先生  
●高田一弘先生  
●森 武昭(24期生)

けていくのではなく、みんなが自由で話し合いながら生活規律をつくっていく。そんな夢をいだいていた。

悪条件の中でも生徒会行事、学校行事に積極的に取り組む生徒の姿があつた。6月の炊事遠足、7月初め西中のグランドを借りての第1回球技大会、マラソン大会、弁論大会、壁新聞コンクール、学園祭、クリスマス、1年目でひたむきな生徒の姿があつた。よくがんばっている。うれしかった。個人、個人の良い面をみつけられた。

最後に全同窓生のみなさん、今、生徒数確保に北星余市は懸命の努力をしている。母校のために力強いご支援をお願いしたい。

最後に全同窓生のみなさん、今、生徒数確保に北星余市は懸命の努力をしている。母校のために力強いご支援をお願いしたい。

## 今のは北星余市

● 森 武昭

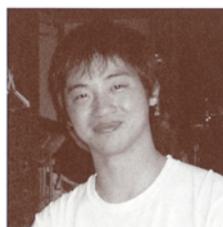
今のは北星余市

周囲に流され、人から言われる事しかできなかつた15歳の自分が、30歳となつた今、当たり前に社会に入り、自分の意思で日々を過し、北海道で生活している。

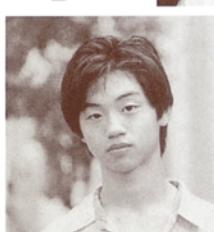
今の自分の原点は北星余市で過した3年間が大きなポイントとなつている。北星余市を卒業後、北海道・道都学生生活。そして帰国後、北海道酪農学園大学に編入し卒業。今年、晴れて

社会人として遅いスタートをした。

2003年(平成15年)夏  
余市にて



1991年(平成3年)  
の森さん



日本に入るのは学生生活が長く、社会に旅立つ時期は遅いが、自分の中では特に特別な事とは感じない。なぜならば北星余市で生活した3年間で皆、それぞれの持つ個性を自由に十分に伸ばし、「一人一人皆生き方が違う」ということを肌で感じたからだ。

自由というものが生きていく中で一番厳しいことなどと知ったのも北星余市がいるのも1期生の大きな力があつたと感謝している。

最後に全同窓生のみなさん、今、生徒数確保に北星余市は懸命の努力をしている。母校のために力強いご支援をお願いしたい。

その、自由の厳しさを高校時代の早い時期に知つたからこそ今の自分があり、どのような環境でも生きていける。例えそれが外国であつても大丈夫と言ふ今の自信に繋がつている。それが私にとっての北星生活であり一番良いところだと私は思うし、今後もそれをバネに力強く生きていこうと思う。

# 貴重な北星余市での12年間

高田一弘

うれしいことに、年数回、「北星学園報」が届いています。そして、テレビ番組による全国報道。北星余市のその後を、しっかりととらえて来たつもりです。

1965年3月の入試が初仕事。同年4月から、教員1期生として12年間、北星余市で生物を担当しました。現在は初代校長山崎金治郎先生の古巣である群馬県安中市のクリスチヤンスクール「新島学園中高」で教えています。根っからの甘党で体調を崩し、今は食事療法で減量に成功し、専任から非常勤に移り、理科の授業のみを受持っています。

ただ、北海道時代から続けてきた放送部に関しては、後任顧問への指導法の引き継ぎを兼ねて、アナウンス指導のお手伝いをしていました。北星余市時代は番組が主体で、特にラジオ文芸部門で「錦百句」が全国4位に輝きました：

合宿して部員と徹夜で番組編集したのが懐かしく充実した思い出です。群馬での取り組みは、アナウンス・朗読部門での個別指導が中心なため、北星余市で部員が一丸となつて苦樂と共にした取り組みは、今となつては貴重で連帯感を満喫できた尊い体験でした。

北星余市最後の担任のとき、生徒の発案で毎朝、日直の音頭で「唱和」を実行し、全員そろつて卒業できたことを時々思い出します。学級討議と行事

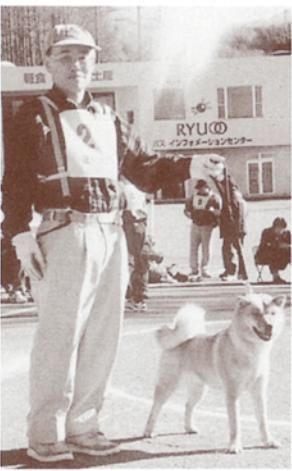
への取り組みが学園生活の支えであつた体験は、ここ群馬に来ても、中学担任や中学部主任のときに生かすことが出来ました。

新島学園に来て驚いたのは、「教育の五原則」の原型がここに生きていたことです。山崎先生がちやつかり北海道に移入したわけです。

今では広く全国募集をして知られる北星余市ですが、私が在任中にすでにその指導の芽が着実に育ち結実しかかつていたともいえます。そして、人間を大切にする教育が、さらに一層の磨きをかけてここにあるわけです。卒業生・在校生・保護者・教職員のみなさまのご多幸をお祈り申し上げます。

※写真は北海道犬のドッグショーのものです。現在、保存活動中です。ホームページもあります。

<http://www.ainu-dog.com/>



1974年(昭和49年)の高田先生

## 第七期同窓会

平成15年4月16日、第7期生が卒業30周年と題し、札幌のグルメシップで同窓会が行われA組担任の深谷先生、D組担任の幅口先生と7期生34名が参加しました。

同窓会の開催のきっかけは、前年4月に行われた「深谷先生の退職に伴なうご苦労様でした会」の席上で決まり、私も幹事の一人として同窓会の準備に加わりました。50歳を目前にし、久々に会った仲間には卒業以来30年振りに再会する人もおり、皆それ自身を変身をとげていたので名簿を見ながら名前を確認する有様でしたが、お酒を飲み、カラオケを唄い、何故か学生時代にあまり会話をしたことの無い人と、昔話に花咲かせられた不思議な楽しい一時を過ごすことができました。

また、深谷先生、幅口先生の参加により同窓会はより一層盛り上がりましたが、C組担任の北口先生、私のクラス担任の岩本先生が病のため参加出来なかつたのは残念に思いました。

私は、同窓会に参加して学生時代に岩本さんとクラスの数人でいつしょに羊蹄山に登つたこと、福祉施設のボランティア活動に参加しキャラブファイヤーで園生と皆で唄つたことなど、学生時代に経験した楽しい思い出を振り返ることができました。



7期  
藤山勇

## 初参加・強歩遠足から同期会へ

今年5月、12期5名が担任だつた佐々木校長と飲もうという話になり、卒業以来初めて顔を見る奴もいて、その勢いで「強歩遠足に挑戦」が決定。6/14小雨の中、銀山生活改善センターに集合。しかし、5名のはずのメンバーが何故か4人、「逃げたな!」の思いが脳裏をよぎった。集合したのは12期C組本間、中村、沢田、馬場(女3人、男1人、女性は旧姓表示)。周りを見渡すと元気のよい後輩達とその親達、そして見慣れた顔の先生達。ふと親たちが我々と同世代であることに気が付き、すっかりPTA気分でスタート、一路学校を目指し30kmを無心で歩き通した。幸いにして4人全員が完歩、気分爽快であった。渋る1人を除き来年も歩くことを約束したが、道連れを増すため「同期会を開いて仲間を募る」ことにした。12期初の同期会開催。来年の強歩遠足が今から楽しみになつた。





## 同窓会活動

### 在校生への支援

- ・奨学金・就学援助金
- ・行事への援助  
強歩遠足・学園祭・弁論大会・クラブ等（全道・全国）
- ・卒業生への記念品（卒業証書用筒）
- ・校内の自販機の管理運営
- ・課外活動援助（バスケットボール）

### 卒業生名簿整理

### 同窓会会報発行

同窓会は、昨年度から始めた校内自販機の管理で在校生や学校から好評を得ていましたが、学校からは売店の運営についても委託要請がされており、役員会ではそのことを慎重に検討してきました。その結果、仕入れルートを確保することや人件費の問題等で同窓会が直接運営に関わることはペイしないと判断しました。しかし、何らかの支援を出来ないかということで、売店を経営していただける業者を捜すことにして、松浦副会長や馬場会長の努力によつて、売店運営を引き受けてくれる西川さんという余市町内の商店経営者と契約を交わすことが出来ました。

2003年度の4月から西川ご夫妻が売店を運営してくれています。開店は朝、昼、放課後と1日3回、弁当類もそろえています。前年度まで校長先生が校長室で販売していたノートなどの文房具類も置いています。西川ご夫妻は朝の早い時間や放課後に、カウン

ター越しに話しかける生徒に対して、相談に乗つたり励ましを与えてくれています。

在校生からは好評で、品物のリクエストも行われていますが、開店から半年が経過した10月に、同窓会事務局は西川さんご夫妻と話し合いを持ち、売店で扱う品目や逆に規制する品目について意見交換しました。校内の売店であることを規範として、今後も定期的な話し合いを持つこととしました。



ある日の売店風景

## 就学援助金5000円(月額)を支給 子供に北星余市を勧めよう

北星高校が余市に教育の灯をともしてから39年。生徒の出身範囲は後志から札幌圏、そして全道・全国へと広がつてきています。

同窓生も1期生から36期生まで6238名の規模になっています。ここ数年間に、同窓会員の子供も北星余市に毎年入学する状況が見られます。

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のため会員の子供が北星余市へ在学中、希望したときは就学援助金を支給します。

希望される方は一定の手続きが必要ですでので同窓会事務局まで申し込んで下さい。

連絡先 事務局（担当 安藤栄子）  
TEL 0135-23-2165  
FAX 0135-22-6097

昭和57年卒業（15期）3年D組（吉田一先生クラス）の皆様お元気ですか？  
さて、来年の2月か3月に“20年ぶり”的クラス会を行いたいと考えておりますが、住所がわからぬ人も多数いるようです。そこでこの掲示板を利用して皆様の消息を知りたいと思っています。  
これをご覧になつた方は、松村悦子（旧姓平野）までご連絡下さい。  
電話011-764-6931  
(夜7時以降ならOKです)。  
ご連絡お待ちしています。

## 編集後記

今年9月、余市の実家から「野球部が今年夏の大会に統いて、秋の新人戦でも一回戦を突破したよ」との嬉しい情報が入りました。実家に下宿している生徒が野球部のキャプテンになったこともあり、早速家族揃って応援に行ってきました。

試合数日前から、「お母さんは昔野球部のマネージャーだったんだよ。岩内高校に勝った時、レフトのファインプレーが『超美技は神の微笑み』って見出しだして道新に載ったんだよ！ すごいishio！」と夕食の度に小学生の娘たちに興奮気味に話す私に、娘たちははある不安を感じたらしく、当日球場に着くなり「恥ずかしいから大きな声で騒がないでね！」ときつく言い渡されました。

しかし、試合が始まると思ひがけない（選手たちゴメン）後輩たちの熱い活躍に静かに応援できるわけがなく、娘たちの言いつけて忘れ難やかな声援を送り続けました。

結局勝ち進むことはできませんでしたが、予想以上の活躍をしてくれた生徒達の姿に未来への可能性を見た気がしました。

時間が許せば是非また応援に出掛けたいと思っています。

卒業生の皆さん、今度は一緒に脳やかに応援しませんか？ (え)

## 「北星余市高校OBの掲示板開設」

10期生板谷幹男さんが同窓生の連絡用掲示板を開設してくれました。同窓会や同期会の開催や友人同士の連絡用等ご自由にお使い下さいとのことです。同窓会会としても是非活用させて頂きます。

URL :

<http://dengon.net/bbs/hokuseiyoichi>

## Shiripaの星 Vol.3 2003年12月1日発行

顧問 篠輪菊雄  
編集長 松村 悅子（15期）  
副編集長 松浦 一法（12期）  
編集委員 安藤 栄子（1期）  
本間美智子（5期）  
馬場 希（12期）  
平野満寿美（14期）

[発行]

北星学園余市高等学校同窓会「シリバの星」編集委員会  
〒046-0003 余市郡余市町黒川町96番地  
TEL (0135)23-2165 FAX (0135)22-6097  
E-mail hokuseiy@netfarm.ne.jp